

別紙様式 3

4 大学連携研究（公募型）支援費に係る研究成果（ホームページ用）

事 項	(所 属)	(職 名)	(氏 名)
共同研究 代表者	京都府立大学	教授	安達敬子
研究組織 の体制	研究分担者 京都工芸繊維大学	教授	並木誠士
研究の名称	室町期～近世初期の源氏図様に見る文学的想像力の基盤 —都における『源氏物語』文化の大衆化をめぐる—		
研究のキー ワード（注1）	源氏物語、狩野派、漢画、やまと絵、遊戯具		
研究の概要 （注2）	<p>本研究は、平安時代に成立をして以来、多くの絵画の題材になっている『源氏物語』を取りあげて、その絵画化のあり方を問うものである。江戸時代以降は、さまざまな流派の絵師により源氏絵が制作されるが、現存作例が多いために個別の作品についての検討は、これまで十分になされて来なかった。本研究では、江戸時代以降の狩野派、雲谷派、鶴澤派などおもに漢画系（中国主題の絵画を多く描く）と言われる絵師たちにより、どのように日本の物語絵が制作されたかを、できる限り作例に即して検討し、それにより、江戸時代以降の源氏絵の広範な展開を考察した。また、それと同時に、カルタ・貝合せなど遊戯性の高い画面形式における源氏絵のあり方についても、実作品に即して検討した結果、享受者の階層によって源氏絵の図様が大きく異なることが明らかになり、遊戯に使用する際の目的や使用者の教養と連動していることが推測された。そこには初学者向けの源氏梗概書の挿絵や連歌・俳諧の寄合書が介在していることが予想される。</p>		
研究の背景	<p>並木は、これまで、狩野派研究を進める一方で、扇面画・カルタ・貝合せなど遊戯性の高い画面形式における絵画のあり方について研究を進めてきた。これらの絵画は和歌や物語と密接に結びついており、遊戯を通して和歌や文学についての知識が受容されていくことなる。また、江戸時代以降は、さまざまな流派の絵師が物語絵を制作するが、それらの作品もまた、庶民の生活のなかに文学的知識を浸透させることに役立った。本研究では『源氏物語』に題材を絞り、国文学と日</p>		

	<p>本美術史の両面から、これらの絵画について研究することとした。</p> <p>安達は、これまで中世から近世初期までの源氏物語受容史研究を進めながらその関連分野として連歌研究を行ってきた。その結果連歌俳諧の寄合語は絵画と結びついたとき、古典の知識を広く流通させる機能を持つことを発見した。古典が時代と共に大衆化して変容する過程で文学と絵画・工芸が融合する具体的な様相を、従来文学研究者からはあまり注目されなかった遊戯具を取り上げて考察することにした。</p>
<p>研究手法</p>	<p>カルタ・貝合せなど遊戯性の高い絵画は、絵画作品として捉えられることが少なく、また、一作品中に多くの図柄があるため、個々の図柄を確認できるような良好な図版がない場合がほとんどである。そのため、本研究では、作品の調査を課題としてすすめることとした。</p> <p>ただし、可能な限り作品の図様を検討する際に、他の同じ題材を扱ったカルタ・貝合わせと比較するだけでなく、近世初期源氏絵の基準作となる土佐光吉・光則の源氏絵、また源氏物語の梗概書や板本の挿絵とも対比を行うように努めた。</p>
<p>研究の進捗状況と成果</p>	<p>源氏絵の現存遺品は多く、また、カルタ・貝合せなども多くの作例が知られているため、それらを網羅的に調査することは不可能である。今回の研究では所蔵先を絞らざるを得なかったが、調査先においては熟覧だけでなく、資料撮影も行い十分な知見を得ることができた。</p> <p>次年度以降も共同研究を継続できれば、より広範な充実した成果を見込むことが期待できる。</p>
<p>地域への研究成果の還元状況</p>	<p>古典に取材した遊戯具は京都府民に身近に親しみやすいものであり、関心も高いと思われる。本来、源氏物語、百人一首等の歌カルタや合貝は京都で作られ、京都の文化に憧れた大名や富裕な商家によって地方に広まっていった。遊戯具による源氏文化の一般社会への浸透という問題について、その性格や特質を明らかにすることは古典の大衆化、普及化を考えるうえで示唆するところ大きく、古典を生み出した京都の地域貢献に裨益すると思う。</p>

研究成果が4 大学連携にも たらず意義	単独の大学では困難な美術と文学の共同研究が行われ、古典の受容と普及という文化史の大きな問題に一定の成果が得られることは、4大学の研究機能の拡大と質的水準の向上に寄与すると考える。
研究発表 (注3)	11月の4大学連携公募型共同研究フォーラムで成果を発表するとともに、学術誌あるいは学会で「4大学連携公募型共同研究成果」として研究発表を行う。

注1 「研究のキーワード」欄には、ホームページ閲覧者が、研究内容のイメージをつかめるように、キーワードとなる用語を3個から5個程度、記述すること。

注2 「研究の概要」欄には、ホームページ閲覧者の理解の助けとなるように、写真、表、グラフ、図などを用いて、作成すること。

注3 「研究発表」欄には、論文、学会発表、ニュース・リリース等について記述すること。

注4 研究成果が「知的財産」の発明に該当する場合は、ホームページでの公表により、新規性の喪失となるため注意すること。

注5 本書は、A4サイズ3ページ以内とすること。